

# 元禄五年絵入版本『竹取物語』 第一図「かぐや姫の養育」を読む

曾根 誠 一

はじめに

『竹取物語』の絵巻・奈良絵本は、国外に所蔵されている伝本も含めると「五十余点<sup>①</sup>」あるという。本来は、それらを網羅的に調査した上で立論すべきであろうが、絵巻・奈良絵本は貴重書に指定されることが多く、披見を重ねると傷みやすく、閲覧に制限が加えられることが多い。鳥の子や楮紙に書写された所謂写本とは、研究環境が大きく異なっている。

そこで、汗顔の至りではあるが、影印本やカラー版が刊行されている伝本と所蔵機関のホーム・ページで公開されている伝本に、国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルム及び、研究書や論文等で絵の構図が紹介されている伝本を加えて、これまでに確認できた二十七本について大まかな分類をし、検討を加えてみたいと思う。

具体的には、奈良絵本の「V期 元禄頃（終息期）一六八

五〜一七一五年頃<sup>②</sup>」に刊行された元禄五年（一六九二）絵入版本の第一図が、先行する絵巻や奈良絵本の構図のどのような流れの中で成立しているのか。その傾向を把握することを目的とするものである。

一

本論に入るに先立ち、整版本の挿絵に関する基本的書誌に誤解があるようなので、それを確認しておく。それは、『竹取物語』版本の挿絵は、最初の整版本である「正保三年版本」（一六四六、「林甚右衛門尉」版）から存在したというものである。

挿絵が何時挿入されたのかについては、夙に中田剛直氏<sup>③</sup>が、次のように述べておられる。

つづいて形の大きさも体裁も全くこれと同じくして、下巻の「寛文三稔云々」の刊記のみを削り、

元禄五年壬申霜月

花洛二条烏丸

長尾平兵衛新刊

なる新たな刊記を入れ、一方上、下巻に各三枚の絵を挿入して同一出版元で出してゐる。ただし題簽のみは「絵

竹とり物語上(下)とくかへ、表紙中央上におしてある。

(二五八頁、一九六五年)

また、片桐洋一<sup>④</sup>氏は版本文庫『竹取翁物語』の解説で、元禄五年版本の第三・四図の見開き写真を正保三年版本の当該頁と比較して掲げた上で、「元禄五年絵入整版本」の絵について、次のように詳述しておられる。

……上巻第二丁の後、第八丁の後、第一五丁の後、下巻第二丁の後、第七丁の後、第一三丁の後にそれぞれ表裏二面ずつの挿絵、計十二景を入れる。ただし、既に行なわれていた版本の間に挿入したわけだから、柱も、「たけ上 ○八」の後「上八」とあり、さらに「たけ上 ○九」と続くというように、上巻の二・八・一五丁、下巻の二・七・一三丁がそれぞれ二枚ずつあるという形になつてしまつてゐるのである。(二四頁、一九七四年)

このことは近年でも、磯部祥子氏<sup>⑤</sup>が次のように述べておられる。

また、絵入りの刊本としては元禄5年(1692)版(上下2冊)がある。これは先行する正保3年(1696)版、寛文3年(1663)版に挿絵を表裏に刷り全12図を加えたもので、その後刷に茨木(「城」の誤植=曾根注)多左衛

門版(刊年未詳)などが存する。絵入りの刊本としてはこの元禄5年版系統以外のものはない。その挿絵は広く享受されたようで、上冊の挿絵の順には錯簡があるものの、その順や構図をそのまま継承した奈良絵本も知られている(中野幸一編『奈良絵本集1竹取物語』解題)。(一〇頁、二〇〇二年)

こうした中田・片桐・磯部の三氏の指摘は、架蔵版本で確認しても齟齬はなく、整版本の『竹取物語』に挿絵が挿入されたのは、元禄五年版本が嚆矢である事実は動かない。しかしながら、最初の整版本である「正保三年版本」の時点で既に存在したという誤認が繰り返されている。その淵源は、徳田進氏<sup>⑥</sup>の次の論述にあるようである。

以上に拠つてみると、九大蔵竹取物語絵巻は近世中期以後との所記(既述上編六―四)よりも遡つて、近世上期の、それも正保前の初期に近いころの作品であつたのであるまいか。絵巻の天地の虫害の跡の多いことと筆つきとはこれを記する。尤も逆に正保二(「三」の誤植=曾根注)年版か寛文版かの通行本挿絵入り竹取物語から着想執筆したとの考え方もできるが、それならば通行本の挿絵を全部取めたであろうにかぐや姫月を見て泣くの

絵が無いのは、どうしたことであろうか。それゆえ正保版は九大蔵竹取物語より後に補加したものと思われる。

これは別の拠本、例えば奈良絵本から得たものではあるまいか。かりに九大蔵竹取物語絵巻も通行本挿絵入り竹取物語も同一祖本、例えば同様の奈良絵本か絵巻から生まれたとしても、両本のうち何れが先かになると、即断は危険だが、やはり右のように先後がつけられよう。(九六〇九七頁、一九七八年)

九州大学国文学研究室蔵の『竹取物語絵巻』の絵(六四図)を整版本の挿絵(十二図)と比較すると、第一図(版本第一図)と第六図(版本十二図)は一致し、第二図(版本第六図)と第三図(版本第七図)は人物の有無や位置に小異があり、第五図(版本第四図)は同一場面ながら構図が異なっていて、第四図は版本には見えない。<sup>⑦</sup>すなわち、四図の構図がほぼ一致していることを踏まえて、徳田氏は、両本に共通する絵の祖本の存在をも考慮に入れつつ、先後関係を九州大学蔵絵巻が先行し、版本は後日これに絵を増補したものであると考えられたのである。

加えて、絵は最初の整版本である正保三年版本の時点で既に挿入されていたのであるから、九州大学蔵絵巻の成立は、

近世中期ではなく「正保前の初期に近いころの作品であった」と判断された。だが、既に確認した如く、整版本の挿絵は元禄五年版本から挿入されるのであって、この誤認を根拠として九州大学蔵絵巻の成立を近世初期末に遡及させることはできない。やはり近世中期写とするのが穏当であろう。

ただ、徳田氏の右の誤認は是正されることなく、最近も継承されている事例が散見される。渡辺雅子氏は、整版本の最初から絵が入っていたとして、次のように記しておられる。

絵入り版本は、正保三年(一六四六)刊を皮切りに、寛文三年(一六六三)、元禄五年(一六九二)、天明八年(一七八八)と再版されている。(二四三頁、二〇〇八年)

また、宮腰直人氏は次のように述べておられる。

一方、簡潔な絵入写本の『竹取物語』も制作され続けていた。藤井隆氏の報告によれば、絵入写本の『竹取物語』の制作は、およそ享保頃まで続くと察せられる。近世初期刊出版文化において『竹取物語』も古活字版が刊行され、正保三年には絵入版本が刊行される。以降、続々と『竹取物語』の絵入版本が享受されていったと見られるが、その傍らで絵入写本も制作され続けていたことになる。その息の長さには驚かざるを得ないが、絵とともに物語

が読み継がれてゆく『竹取物語』の享受を、写本と版本、

のである。

双方への複眼的な視座で捉えることの必要性をあらため

また、針本正行氏<sup>10</sup>は、座談会で次のように語っておられる。

て痛感させられる。(一二六頁、二〇一〇年)

『竹取物語』の享受を、写本・版本の絵も取り込みながら、

針本▼正保版本の基にした昇天の場面は来迎、つまり天人が降りてきている図ですね。國學院本も武田本も、それからハイド旧蔵本も、天人が右上方から降りて来ていて、まるで阿弥陀来迎図のような構図で描かれている。

複眼的な視座から捉え直して行こうとする視点は、基本的に正しい重要な指摘であろう。ただ、整版本に挿絵が挿入されたのは、「最盛期」(Ⅳ期、寛文頃)より以前の「生産期」

一方、正保版本のものは冊子の横形に引いて広げたところで真ん中に武士たちがかぐや姫を守る形で、左の奥のところにかぐや姫と翁と媪がいるという図になっています。それに対してこの同じ図は元禄期に成立した小型本の『竹取物語絵巻』にはなくて、かぐや姫は車に乗らずに雲の上に立っている図になっています。(一二頁、二〇一〇年)

(Ⅲ期、寛永頃一六二五〜一六五五年頃)に該当する正保三

年版本なのではなく、奈良絵本の「終息期」にあたる元禄五

年版本なのであって、そこには四十六年という半世紀に近い

す。それに対してこの同じ図は元禄期に成立した小型本の『竹取物語絵巻』にはなくて、かぐや姫は車に乗らずに雲の上に立っている図になっています。(一二頁、二〇一〇年)

時間的誤認がある以上、版本挿絵の影響は限定的なものに留まらざるを得なかったように思われる。

具体的に述べれば、宮腰氏が引用されている『枯枕集』(寛

文八年一六六八刊)「第五十四梯」の条の「大きなるのほり

はしをさ、せて、みづから取にのほり給へるに、ふみはづし

針本氏の発言と同じ頁の上段に、元禄五年絵入版本の第十図と第十二図が掲げてあり、「正保版本」と明記されている

て落給ひ、こしをうち折、かいなをそんじてなやみ給ひける」という叙述は、『竹取物語』の原文に則しておらず、異時同

ことを勘案すると、針本氏の発言も、版本の挿絵は整版本の嚆矢である正保三年版本の時点で既に挿入されていたと誤認されているように思われるのである。

図法で描かれた麻呂足の転落場面の絵を短絡的に理解した結果としての誤読のだが、筆者が参考にした絵は版本のそれ

が崩壊しかねず、原本に当たって事実を確認することの重要

ではあり得ず、奈良絵本か絵巻の絵であったことが判明する

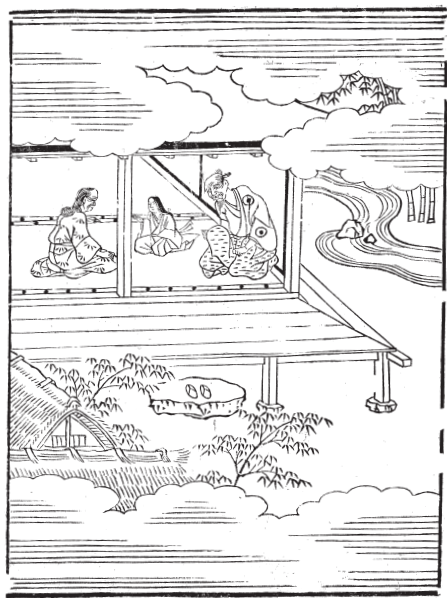
瑣末なことを縷々述べてきたが、誤認に基づく立論は基盤

性を再確認しておきたいと思う。

## 二

元禄五年絵入版本の挿絵第一図は、「かぐや姫の養育」の場面を描いたものである（左図参照、架蔵本）。管見に入つた他の二十四伝本の第一図もこれに同じいが、異なる構図も若干あるので、先ず異なる三伝本について述べておく。

宮内庁書陵部蔵絵巻<sup>11</sup>は、折烏帽子姿で髯面の竹取の翁が右を向いてかぐや姫を両掌に乗せ見詰める、発見直後の様子を描いており、吉田幸一氏蔵絵巻<sup>12</sup>は、腰に鎌を差した翁がかぐ



や姫を両掌に乗せて茅屋に連れ帰り、媪が両手を前に差し出して驚きとともに受け取るうとする帰宅時の様子を描いている。また、井田等氏蔵奈良絵本<sup>13</sup>は、竹林に立つ侍烏帽子の翁と離れて奥に座るかぐや姫をやや簡略に描き、右下に茅屋を配している。すなわち、かぐや姫の発見時か茅屋に連れ帰る構図のいずれかを採用しているのである。

次に、元禄五年版本の「かぐや姫の養育」の構図を試読すると、次のようになる。

中央に描かれる邸宅は、かぐや姫養育開始後三か月で「勢ひ猛の者」になつた翁が、その財に任せて新築した上流貴族の邸宅に準ずる豪邸なのかといえは、第二図「かぐや姫に対する求婚」以下の翁邸と比較すると格子も御簾も描かれておらず、見劣りする感は否めない。第三図の阿倍御主人が王慶と対面し、右隅に海岸と舟が併せて描かれる場面の邸宅と同一である。磯部祥子氏<sup>14</sup>がチエスター・ピーター・ライブラリー蔵J-100一本（奈良絵本、寛文延宝頃か）で指摘されている、「竹取翁の屋敷の図様」は多くの場合二段階の変化を取るのに、「全段の中で3段階に変化している」（三五頁）、すなわち、賤家（第一図）から草庵風の屋敷（第二図）、寝殿造風の邸宅（第十六図）へと変化しているという指摘を参

考にすれば、これは第二段階の邸宅に相当しよう。また、東側の庭には、竹と遣り水が描かれている。

室内の廂に、小さく描かれた袷姿のかぐや姫が座り、右に禿髪で直垂姿の竹取の翁（以下、服装は同一）、左に髪が伸びきらず長さの足りない褶姿の姫（第二図以下は袷姿）が座っている。二人の服装は庶民のそれである。かぐや姫の右手は、姫に向かって差し出され、姫と会話が交わされている。

その二人を、翁が相好を崩して聞き入っている和やかな団欒の様子が描かれている。これは、「この児、養ふほどに、すくすくと大きくなりまさる」様子とともに、「この児の容貌のけうらなること、世になく、家の内は、暗き所なく、光り満ちたり。翁、心地あしく苦しき時も、この子を見れば、苦しきこともやみぬ。腹立たしきこともなくさみにけり」という状態も実現された様子を表現していると考えられる。

翁夫婦は、「翁」「姫」と称されるに相応しい四十歳を超えた老人として、額と頬に皺を刻んでおり、髪の毛は白髪交じりに描かれている。翁は頭髪が後退しており、口髭と顎髭を伸ばしている。かぐや姫は、翁夫婦に比して小さく描かれており、三か月で成人するに至る過程のある時点の姿を、翁夫婦との仲睦まじい交流を通して描いているのである。

また、左下に立木とともに描かれている茅屋の屋根は、翁がかぐや姫を竹中に見出す前後の時期の住居を描いたものであろう。姫の養育開始後に、竹中から得た「こがね」をもって新装なった第二段階の邸宅の南庭に、旧宅をそのまま残したとは考え難いので、一図に二つの異なる時間を描く「異時同図法」が用いられていると理解されよう。絵巻の時間は、巻き取りながら読み進める鑑賞の物理的制約上、右から左へと時間が展開して行くのが一般的であるのに対して、一面の狭い空間内で完結することを求められる冊子本の挿絵である本図の場合、左下隅に描いて読者の注意を喚起しているのである。

以上の元禄版本第一図の読み取りに基づいて、描かれる人物・かぐや姫の描写・翁家の様子・異時同図法の有無・特徴の五項目について、管見に入った二四伝本を元禄五年版本とともに一覧表にまとめると、次頁の通りである。

次頁の表に従って、各項目ごとに検討を加えるが、九曜文库乙本の挿絵は元禄五年版本の転写なので、検討の対象から除外する。それ故、検討対象の実伝本数は二十三本となることを確認しておく。

伝本	人物	姫描写	翁家	異時同図法	特徴
元禄五年版本	姫翁嬢	座	家屋／茅屋	○左下に茅屋	九州大本絵巻と同一の構図
逸翁美術館本絵巻	姫翁嬢 子供三人	箱	家屋／茅屋	○左下に茅屋	姫左手を、簀子右側の子供二人の方に差し出す
九州大本絵巻	姫翁嬢	座	家屋／茅屋	○左下に茅屋	元禄版本と同一の構図
九曜文庫本絵巻	姫翁嬢 子供五人	箱	茅屋	×	姫庭を向き、門を入る子供二人、続く二人、橋に一人。屏風
国学院大学武田本絵巻	姫翁嬢	箱	家屋	×	頭巾を被る翁。翁嬢の服装、豪族化後と同じ。屏風
国学院大学ハイド本絵巻	姫翁嬢 子供六人	箱	家屋	×	簀子に子供五人、門に一人。姫簀子の子と語るか。屏風
国会図書館本絵巻	姫翁嬢	籠	茅屋	×	翁嬢の服装、豪族化後と同じ
諏訪市博物館本絵巻	姫翁嬢 子供三人	箱	家屋／茅屋	○左下に茅屋	姫左手を、簀子右側の子供二人の方に差し出す
CBL蔵絵巻 J一二五本	姫翁嬢	箱	家屋	○姫を連れ帰る翁／姫の養育	翁狩衣・姫桂の服装、豪族化後と同じ。屏風、刀
CBL蔵絵巻 J一一八八本	姫翁嬢、 子供四人	箱	茅屋	×	姫廂から、庭・門下・橋上・続く四人の子供を見遣る
東京大本絵巻	姫翁嬢、 侍女一人	籠	家屋	×	姫は嬢を見、翁は庭に立って侍女と語る
立教大本絵巻	姫翁嬢 子供三人	箱	茅屋	×	姫廂から、門下・橋上・続く三人の子供を見遣る
白杵市図書本	姫翁嬢	座	家屋	×	翁、侍烏帽子に刀

伝本	人物	姫描写	翁家	異時同図法	特徴
九州大支子本	姫翁嬢	籠	茅屋	×	頭巾を被る翁は、庭に立つ。龍谷大学乙本に類似
神宮文庫本	姫翁嬢、 従者二人	箱	豪邸	×	姫簀子に座る侍女を見る。従者は刀を差し出す
九曜文庫甲本	姫翁嬢	座	家屋	×	翁嬢の服装、豪族化後と同じ。屏風
九曜文庫乙本	姫翁嬢	座	家屋／茅屋	○左下に茅屋	元禄版本の挿絵の転写本
中京大本	姫翁嬢 子供三人	箱	家屋／茅屋	○右下に茅屋	簀子・踏み石・門に子供各一人
東北大狩野文庫本	姫翁嬢	座	家屋	×	翁左嬢右。踏み石が俵様。軒先に竹を立て掛ける。塀
フェリス女学院大本	姫翁嬢 子供三人	籠	家屋	○竹林の翁／姫の養育	翁左嬢右。翁狩衣・姫桂の服装、豪族化後と同じ
宮本長興氏本	姫翁嬢 子供四人	座	家屋	×	廂に子供一人、簀子に三人
メトロポリタン美術館本	姫翁嬢 子供二人	籠	茅屋	×	翁嬢は頭巾を被る。子供二人は犬を見遣る
龍谷大甲本	姫嬢	座	豪邸	×	横長本、絵が簡略
龍谷大乙本	姫翁嬢	箱	茅屋	×	翁嬢は頭巾を被る。翁庭に立つ。九州大学支子文庫本に類似
小学館蔵画帖	姫翁嬢	籠	茅屋	×	簀子に鎌

\*CBL……チェスター・ピーター・ライブラリーの略称

先ず、描かれた【人物】を検討すると、「姫翁嬢」の三人だけを構図十一伝本（姫嬢だけで翁を欠く龍谷大学甲本も変種として含めた）、その三人に子供が加わる構図十伝本、更に侍女や従者が加わる構図二伝本、の三種類に大別できる。これを絵巻と奈良絵本で再分類してみても、絵巻は「姫翁嬢」五伝本（小学館蔵画帖を含む。以下同じ）、「姫翁嬢／子供」六伝本、「姫翁嬢／子供／侍女」一伝本となり、奈良絵本は「姫翁嬢」六伝本、「姫翁嬢／子供」四伝本、「姫翁嬢／侍女・家人」一伝本となり、いずれも「姫翁嬢」と「姫翁嬢／子供」の構図に有意差はなく、描かれる人物としてはこの二つが代表的な構図ということになる。

かぐや姫と翁夫婦の座る位置は、子供が描かれるか否かに関係なく、姫を中心にして右に翁、左に嬢という構図が一般的である。翁が庭に立つ東京大学本・九州大学支子文庫本・龍谷大学乙本でも、図の右側に描かれて左に移動乃至左側にいる人物に対して行動を起こしている。また、既述した吉田幸一氏蔵絵巻でも、姫を連れ帰った翁は右から左に移動して、左端に描かれる家の中の嬢に渡そうとしている。これは絵巻の時間は右から左へ流れて行くという原則に従っており、国学院大学ハイド本・中京大学本では翁家の門が右端に描かれ

ているし、描かない場合でもそれを前提としていることを反映しているからであろう。

その一方で、翁夫婦の座る位置が逆転している伝本として、フェリス女学院大学本と東北大学狩野文庫本がある。前者は後述する如く、中央に描かれたすやり霞で、上部の竹林で働かぐや姫発見以前の竹取の翁と、下部の姫を連れ帰って廂の籠に入れ見守る場面との転換を図った異同図法を用いた描写である。翁は上部で、竹林を右から左に向かって移動しており、その延長線上で下部の翁家での養育の場面へと展開する時、翁の移動として最も自然なのは左端から右へと戻ってくることであり、それ故に左端に描かれる構図が取られたのであろう。だが、狩野文庫本に、そのような必然性は読み取れず、翁が左側に描かれた理由は不明である。

さて、侍女が描かれる構図について考えてみると、東京大学本の庭に立つ翁と語り合う簀子に座る侍女は、翁家が第二図以降の検皮葺きとは異なり草葺きで、翁が豪族化する以前の様子が描かれている点に注目すると、侍女というより乳母と考えるべきなのかも知れない。簀子に座る二人の子供の視線が、その女性に注がれている理由も、このように理解することで納得できるように思われる。とすると、この子供達は



姫の乳母子ということになる。また、侍女の描かれる残る一伝本の神宮文庫本では、廂で箱に入るかぐや姫の視線が簀子の左端（図の左下端）に座る侍女に注がれ、廂に座る翁の右側の簀子（図の右端）には、刀を差した従者二人が描かれている。翁家が第一図から富豪の長者の豪邸として描かれている以上、この侍女は大勢いる中の一人と理解するのが妥当であろうが、姫の視線を重く受け止めれば、東京大学本と同じく乳母と理解できるように思われる。第一図で侍女を描く構図の意図は、この点にあったのであろう。

子供が描かれる構図においては、廂に座るかぐや姫の視線は、子供のいる方向に差し向けられる場合と子供を見ない場合の両様がある。絵巻の場合は、逸翁美術館本・諏訪市博物館本では、姫の左手が右に差し出されて視線は簀子の右側に立つ二人の子供に向けられ、国学院大学ハイド本でも、簀子に座る右側から二人目の子供と視線を合わせ、会話を交わしているように見受けられる。そして、九曜文庫本では、翁の茅屋の門をくぐる二人の子供、それに続く二人、最後尾の橋を渡る一人が右から左に移動する形で描かれ、室内の姫の視線は南を向く家と連動して門をくぐる先頭の二人に注がれている（三人目以降の子供は死角に入って、姫には見えない）。

立教大学本でも、翁家の門で振り返る一人、橋を渡る一人、それに続いて右手を顔の前に掲げ遠くを見遣る一人が描かれているが、右を向く茅屋の廂の姫は、三人の子供を見遣る構図になっている。ほぼ同じ構図のCBL蔵J一一八八本は、立教大学本に庭で右手を前に差し出して走り寄る一人を加えて四人にしている。だが、東京大学本では、廂の姫の視線は姫に向けられ、簀子に座る二人の子供のそれは右端の侍女に向けられていて、唯一重なっていない。理由は前述した通りであり、絵巻で子供が描かれる場合、かぐや姫の視線は子供の方に向けられる構図となるのが原則であるといえよう。だが、奈良絵本では逆の結果になる。かぐや姫が子供の方に視線を向けるのは、フェリス女学院大学本の右に座る三人の子供に向けている事例だけであり、中京大学本では、姫は廂に視線を向けて、簀子や踏石に立つ子供を見ていない。宮本本でも同様に廂に視線を向けて、廂の一人簀子の三人の子供を見ていない。メトロポリタン本も同様で、庭に立つ二人の子供は犬に興味をそそられている。

かぐや姫が子供の方に視線を向けるか否かについて、絵巻は向け、奈良絵本は向けない構図が原則になるという差異が読み取れた。理由としては、絵巻は横幅が広く余裕があるこ

とと関連しているかと思われるが、奈良絵本で視線を向けない理由は、横幅が狭いことだけでは説明がつかない。今後の課題としたい。

次に、翁家に引き取られた後のかぐや姫の【姫描写】がどのようになされているかを、検討してみたい。

七頁の表に明らかのように、三種類に分類される。箱に入る型十一伝本、籠に入る型六伝本、廂に座る型六伝本である。絵巻と奈良絵本に分けて再分類すると、絵巻では、箱に入る型八伝本、籠に入る型三伝本、廂に座る型一伝本となり、奈良絵本では、箱に入る型三伝本、籠に入る型三伝本、廂に座る型五伝本となる。絵巻では箱に入る型、奈良絵本では廂に座る型が一般的なのだといえよう。

箱に入ったかぐや姫が多く描かれるのは、「いとをさなけれは、こに入てやしなふ」(古活字十行甲本)という本文の「籠」が理解しにくかったのと、直前の接続助詞「ば」に引かれたのを原因として、「箱」という理解し易い異文が生じ、古活字十行乙本・十一行丙本・同丁本に引き継がれ、最初の整版本である正保三年版本にも引き継がれたことで、江戸期の流布本文は「箱」が主流となったことが反映していよう。

加えて、絵師は独自性を優先して描くのではなく、下絵に依拠しつつ、発注者の意向等も勘案して絵を作成したと考えられるのであり、絵に特別な意図を読み取ることは基本的に困難であろう。「箱」の構図が描かれるのも、こうした事情に基づいてのことであつたらう。ただ、例外がない訳ではなく、江戸初期の元和寛永頃に作成されたCBL蔵J一二五本について、「悲しくも滑稽な貴公子たちと、地上界と天上界との接触という異常な時空間を絵画化すること」(一五四頁)に、渡辺雅子氏は制作者の意図を読み取っておられる。ただ、J一二五本には「いとおさなければ、手はこに入てやしなふ」とあり、「箱」より意改された下位の本文になっている。これは、古活字十一行乙本と一致しており、該本と同じ本文を持つ第二類本の何れかに拠つたのであろう。

また、元来の本文である「籠」に入る型の構図が絵巻・奈良絵本ともに各三伝本ずつあることは、写本に依拠した可能性もあるものの、古活字十行甲本がそれなりに享受されたこととの反映のように思われる。

また、廂に座る型は、連れ帰った直後の様子を描くのではなく、成人するまで三か月を要した過程のある時点に焦点を当てた、という設定での構図ということになる。

次に、【翁家】の描写について、既述した磯部祥子氏の指摘される二段階の変化なのか三段階なのかも含めて確認してみたい。ただ、この検討のためには、複数の絵の確認が必要となるので、七頁の表の伝本の全てについて言及できる訳ではないことを予めお断りしておく。

先ず、翁家を草葺きの茅屋・板葺きの家屋・豪邸の三種類に分けて分類すると、茅屋八伝本、家屋十三伝本、豪邸二伝本となる。家屋を描く伝本の中に、絵の下部に草葺きの茅屋を描くものが四伝本あり、それを加えると、本来の翁家は草葺きの茅屋であったと理解されていたといえよう。絵巻と奈良絵本に分けて分類すると、絵巻は茅屋五伝本、家屋七伝本（茅屋を三伝本が描く）、豪邸なしとなる。奈良絵本は茅屋三（伝本、家屋六伝本（茅屋を一伝本が描く）、豪邸二伝本となる。家屋を中心に描き、茅屋がこれに次いでいることを確認した上で、各伝本を見て行く。

元禄五年版本の翁家は、廂と屋根は以降の絵と同一なのだが、簀子の板が廂に対して平行である点と踏み石が異なっている。構図上描けなかったからなのか、格子も御簾も描かれていない。また、かぐや姫と出会う前後の翁家が左下に草葺きの茅屋として描かれていることを勘案すると、三段階の変

化の内の第二段階の家ということになろう。

九州大学本絵巻は、元禄版本とほぼ同じ構図なので、詳細はこれと同一である。左下にかぐや姫と出会う前後の翁の草葺きの茅屋が描かれていることから、翁邸は三段階の内の第二段階の家ということなろう。

また、九曜文庫本絵巻では、草葺きの茅屋として描かれており、簀子の板が廂に対して平行である点等、質素な家として描かれている。第二図以降は、上流貴族の邸宅に異ならぬ豪邸として描かれており、二段階の変化の内の第一段階の家となる。

国学院大学武田本絵巻では、屋根は板葺きで草葺きに比すればはりますが、簀子の板の角が廂に対して平行である点や桧垣や柴垣がある点も、第二図以降の豪邸とは異なっており、二段階の内の第一段階の家となる。

国会図書館本絵巻では、草葺きの茅屋として描かれ、簀子は竹を素材とし、踏み石と柴垣が配されているが、第二図以降は豪邸として描かれており、二段階の内の第一段階の家となる。

諏訪市博物館本（逸翁美術館本も同図）の翁邸は、屋根の描き方が第十二・十四図の翁邸や他家の桧皮葺きとは異なっ

ており、簀子の板が廂に対して平行である点と踏み石が元禄五年版本と同一で、以降の豪邸とは異なっている。加えて、左端の格子や御簾があるべき所に板戸が張られており、左下にかぐや姫と出会う前後の翁の草葺きの茅屋が描かれていることを勘案すると、翁邸は三段階の内の第二段階の家ということなろう。

CB L蔵丁一―二五本絵巻では、屋根は草葺きで簀子は竹製、格子も御簾もなく、家の入り口等も庶民の家として描かれているのに対して、第二図以降は豪邸として描かれているので、二段階の内の第一段階の家となる。

東京大学本絵巻では、草葺きの茅屋として描かれ、簀子の板が廂に対して平行である点と踏み石があり、左端が板戸になっている三点で、第二図以降の豪邸とは異なっているのので、二段階の内の第一段階の家となる。

立教大学本絵巻では、草葺きの茅屋として描かれ、簀子の板が廂に対して平行である点や一部が竹製になっていること、踏み石や柴垣があるのに対して、第二図以降は豪邸として描かれているので、二段階の内の第一段階の家となる。

以上の絵巻の結果をまとめると、翁邸が三段階の変化で描かれるのは、草葺きの茅屋を図の下部に取り込んだ場合に限

られている。賤家から草庵風の屋敷、寝殿造風の邸宅へと描き分けるCB L蔵丁一〇〇一本とは、聊か事情を異にしているのであり、翁家の変化は二段階で描かれるのが原則であるといえよう。

以下、奈良絵本の場合を略述すると、翁家の変化は、絵巻と同様に二段階で描かれるのが原則であるが、図の右下に草葺きの茅屋が描かれるのが原則であるが、図の右下に草葺きの茅屋が描かれる中京大学本は、三段階の変化の内の第二段階の家となり、最初から豪邸で描かれる神宮文庫本と龍谷大学甲本は変化が見られない点で注意される。

また、草葺きの茅屋として描かれる伝本は、一間で描かれることを原則としている。九州大学支子文庫本は踏み石がなく、宮本本は簀子の板が廂に対して平行で踏み石が描かれ、龍谷大学乙本は簀子も踏み石も描かれていない。また、板葺きの家屋として描かれる伝本の場合、複数の部屋が描かれる九曜文庫甲本は、簀子がなく長方形の踏み石が描かれ、室内には屏風が置かれている。東北大学狩野文庫本は、右下に本格的な塀が描かれながら簀子がなく、踏み石は俵様で左の軒に竹が立て掛けてある。一間で描かれる白杵市図書館本は、簀子の板が廂に対して平行で踏み石が置かれ、中京大学本も同様に、簀子の板が廂に対して平行で踏み石が置かれている。

フェリス女学院大学の簀子は板を廂に垂直に並べた本格的なものだが、室内の調度類は描かれていない。いずれにせよ、どの伝本も御簾と格子が描かれていない点は共通する特徴として指摘できよう。

最後に、【異時同図法】について、検討を加えてみたい。

元禄五年版本の左下に、立木とともに描かれている草葺きの茅屋は、翁がかぐや姫を竹中に見出す前後の時期の住居を描いたものであり、それとかぐや姫・翁・姫が廂に座る現在の邸宅とが、異時同図法になっていよう。この構図は、徳田進氏によつて元禄五年版本との先後関係が論じられている九州大学本絵巻の他、同一の下絵に基づいて描かれたと思われる諏訪市博物館本絵巻と逸翁美術館本絵巻にも見られる<sup>(18)</sup>。奈良絵本では、中京大学本だけに右下に確認される。第一図に限つて構図の類似性をいえば、元禄五年版本が踏まえたのは絵巻の絵乃至下絵であつた可能性が高いといえよう。ただ、最終的な結論は十二図全体を見渡した上でないと確定できないことは、贅言を要しない。

CB L蔵J一二五本絵巻は、右側にかくや姫を掌に乗せて連れ帰る竹取の翁が描かれ、左側には廂で、箱に入れられ

たかくや姫と袴姿の姫が顔を見合わせ、右に烏帽子狩衣姿の翁が座る養育の場面が描かれており、典型的な異時同図法になっている。

また、フェリス女学院大学本は、上部に竹林で働くかぐや姫発見以前の竹取の翁を描き、すやり霞で場面の転換を図つた上で、下部に連れ帰つた姫を廂の籠に入れ、見守る折烏帽子狩衣姿の翁と袴姿の姫が三人の子供とともに描かれていて、異時同図法になっている。

この他に気付いた特徴としては、翁夫婦が揃つて頭巾を被つた姿で描かれるメトロポリタン美術館本と龍谷大学乙本、竹取の翁だけが頭巾を被る国学院大学武田本と九州大学支子文庫本がある。絵師集団の特徴・傾向として捉えることができるのかも知れない。

### 三

以上の論述を踏まえて、元禄五年絵入版本第一図「かぐや姫の養育」の構図の位置付けを試みたい。

描かれる人物がかぐや姫と翁夫婦の三人であるのは、絵巻・奈良絵本を問わず、子供を加えて描く場合も含めて、「姫の

「養育」の代表的な構図である。また、かぐや姫が廂に座る型で描かれるのは、奈良絵本では一般的な型であるが、絵巻では箱に入る型で描かれることが多い。翁家が三段階の変化の内第二段階の家となっているのは、図の左下隅に、かぐや姫を竹中に発見する前後に居住していた草葺きの茅屋を描く異時同図法を取っているためである。この方法を取っている伝本は、奈良絵本では中京大学本だけであり、先後関係は不明だが、元禄五年版本の第一図と同一の図を有する九州大学本絵巻や、諏訪市博物館本・逸翁美術館本絵巻（両伝本の絵は同一）のような構図乃至下書きを踏まえて描かれたのである。

## 註

- (1) 「座談会 王朝物語の絵画―『竹取』『伊勢』を中心に」(『武蔵野文学』Wide vol.01 二〇一〇年九月)における針本正行氏の発言。七頁。
- (2) 石川透氏編『奈良絵本・絵巻の宇宙 カラー版』(非売品 二〇一〇年三月) 六頁。以下、奈良絵本・絵巻の制作時期区分は、本書に拠った。
- (3) 中田剛直氏『竹取物語の研究 校異篇 解説篇』(塙書房

- 一九六五年六月)
- (4) 片桐洋一氏『竹取翁物語について』(版本文庫8 国書刊行会 一九七四年十一月)
- (5) 磯部祥子氏『竹取物語総説』(『チェスター・ピーティールイブラリー 絵巻絵本解題目録』解題篇 勉誠出版 二〇〇二年三月)
- (6) 徳田進氏『竹取物語絵巻の系譜的研究―橘守部作同絵巻への展開』(桜楓社 一九七八年十二月)
- (7) 九州大学蔵絵巻と元禄五年版本の挿絵の比較については、別稿で言及する用意をしている。
- (8) 渡辺雅子氏『CBL本『竹取物語絵巻』二巻』(『チェスター・ピーティールイブラリー』所蔵『竹取物語絵巻』 勉誠出版 二〇〇八年七月)
- (9) 宮腰直人氏『竹取物語絵巻』小考―燕の子安具の場面をめぐる(針本正行氏編『物語絵の世界』非売品 二〇一〇年三月)
- (10) (1)に同じ。
- (11) 『本物の絵巻を現代語で読む 竹取物語絵巻』(勉誠出版 二〇〇三年一月) 三頁
- (12) 片桐洋一氏『図説日本の古典5 竹取物語・伊勢物語』(集英社 一九七八年八月) 六一頁
- (13) 工藤早弓氏『奈良絵本 下』(紫紅社文庫 二〇〇六年一〇月) 九一頁

- (14) (5) 前掲書の「4竹取物語 CBLJ一〇〇一」、三五頁。  
管見に入った二十四伝本について、依拠した資料名乃至媒体を記しておく。
- (15) 逸翁美術館本絵巻（江戸中期写）……国文学研究資料館蔵  
マイクログフィルム

- ・九州大学本絵巻（江戸中期写）……九州大学図書館HP（ホーム・ページ）、国文学研究資料館蔵マイクログフィルム
- ・九曜文庫本絵巻（寛文延宝頃写）……『九曜文庫蔵奈良絵本・絵巻集成 竹取物語絵巻』勉誠出版 二〇〇七年七月）
- ・国学院大学武田本絵巻（江戸前期写）……国学院大学図書館HP
- ・国学院大学ハイド本絵巻（江戸前期写）……針本正行氏『物語絵巻の本文とその享受に関する総合的研究』（二〇〇八年三月）三頁
- ・国会図書館本絵巻……国会図書館HP
- ・諏訪市博物館本絵巻（元禄年間迄写）……諏訪市博物館HP
- ・『竹取物語絵巻』（諏訪市博物館編 二〇〇三年一月）
- ・チェスター・ピーティ・ライブラリー蔵J一二五本絵巻（元和寛永頃写）……『竹取物語絵巻』（勉誠出版 二〇〇八年七月）。尚、『チェスター ピーティ ライブラリー蔵 日本絵入本及絵本目録』（弘文荘 一九七九年八月）四頁の写真3は、別の絵巻か奈良絵本の写真の混入である。

- ・チェスター・ピーティ・ライブラリー蔵J一八八本絵巻（寛文頃写）……『チェスター ピーティ ライブラリー蔵 日本絵入本及絵本目録』（弘文荘 一九七九年八月）五頁の写真8参照。

- ・東京大学本絵巻……国文学研究資料館蔵マイクログフィルム
- ・立教大学本絵巻（江戸中期写）……立教大学図書館HP
- ・白杵市立図書館本奈良絵本（江戸初期写）……国文学研究資料館蔵マイクログフィルム
- ・九州大学支子文庫本奈良絵本（江戸中期写）……九州大学図書館HP、国文学研究資料館蔵マイクログフィルム
- ・神宮文庫本奈良絵本……国文学研究資料館蔵マイクログフィルム
- ・九曜文庫本奈良絵本甲本（延宝頃写）／乙本（元禄頃写）……『奈良絵本絵巻集1 竹取物語』（早稲田大学出版部 一九八七年一月）
- ・中京大学本奈良絵本……国文学研究資料館蔵マイクログフィルム
- ・東北大学狩野文庫本奈良絵本……東北大学狩野文庫マイクログフィルム
- ・フェリス女学院大学本奈良絵本……フェリス女学院大学図書館HP
- ・宮本長興氏本奈良絵本……国文学研究資料館蔵マイクログフィルム、徳田進氏『竹取物語絵巻の系譜的研究』橘守部作

同絵巻への展開』(桜楓社 一九七八年二月) 三六頁

・メトロポリタン美術館本奈良絵本……渡辺雅子氏『竹取物語』絵本―メトロポリタン美術館本を中心にして』(中古文学 第八六号 二〇一〇年十二月) 七頁

・龍谷大学本奈良絵本甲本(十七世紀後半写)／乙本(寛文延宝頃写)……『龍谷大学善本叢書 奈良絵本 上』(思文閣出版 二〇〇二年三月)

・小学館藏画帖……徳田進氏『竹取物語絵巻の系譜的研究―橘守部作同絵巻への展開』(桜楓社 一九七八年二月) 八八頁

尚、天理図書館藏奈良絵本は、保護のため閲覧停止であったこと、京都大学蔵絵巻は、ペン書きの外題が誤記されたもので、絵は『竹取物語』ではないこと、大阪大学蔵奈良絵本は、現在所在が確認できないことを申し添えておく。

(16) 中野幸一編『奈良絵本絵巻集1 竹取物語』(早稲田大学出版部 一九八七年一月)「解題」6頁。

(17) (8)に同じ。

(18) 諏訪市博物館本と逸翁美術館本の絵は、全十五図中一図を除いて一致(三図に小異あり)しながら、配列で三か所相違している問題については、拙稿『竹取物語』絵の配列と多義性―逸翁美術館本と諏訪市博物館本の比較を通して』(花園大学日本文学論究 第四号 二〇一一年十二月)を参照されたい。

#### 付記

本稿は、二〇一一年度特別個人研究費による研究成果の一部であることを明記して、調査活動等に際してご芳情を賜った方々に対し、衷心より篤く御礼申し上げます。

(そね・せいいち／本学日本文学科教授)